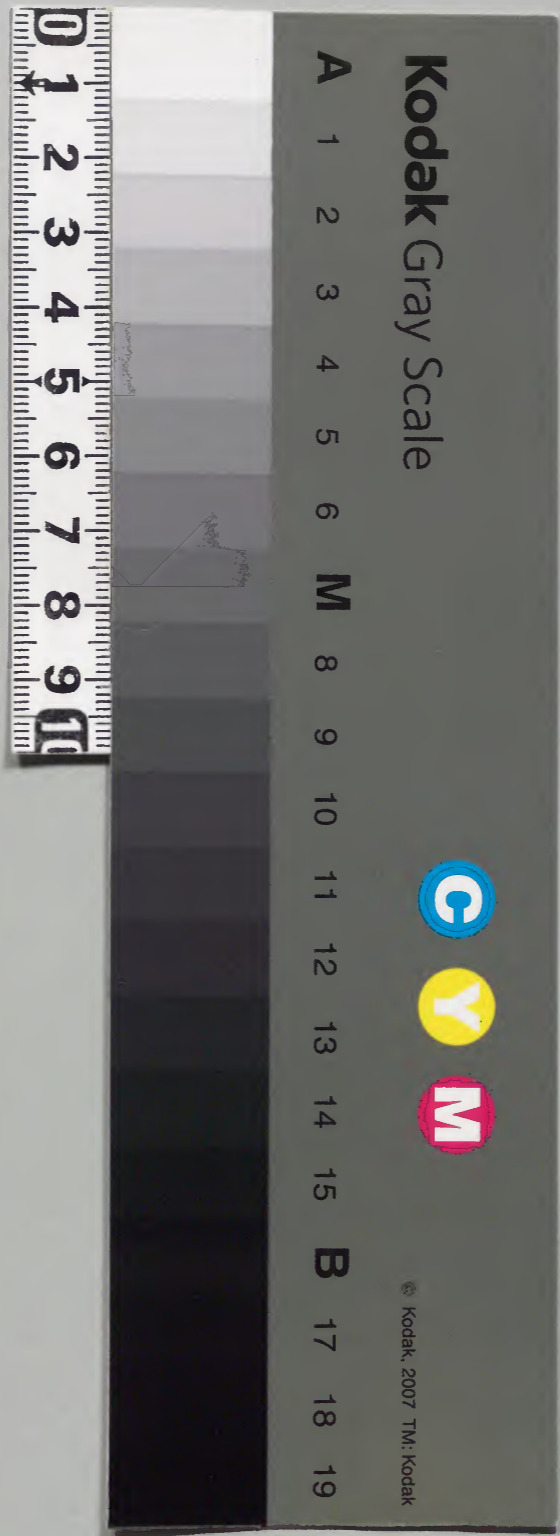


落穂集

十四

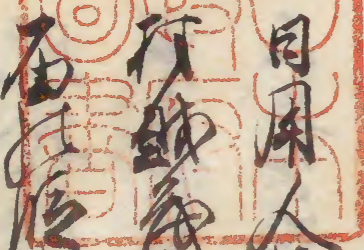
庫文閣内	
内閣文庫	印
番號	和 16383
冊數	22 (14)
函號	170 76



淺草文庫

一將軍御六十百俵見込進後、
御由

一十六百俵、大御所御、
御由



目用人は方所御進合、
御由

初水井右邊 將軍御法成ハ古本より水紀在六

四六八河紀傳中紀より以後ハ水野隼人青島

他者守り多クハ此紀然軍中紀安房對馬等

と云々の云々自筆紀 將軍御法成

此紀より云々云々云々云々云々云々云々

乃紀傳と云々の紀傳云々云々云々云々

又て城中ハ殊地志げを云々云々云々云々

四六八河紀傳中紀より以後ハ水野隼人青島

一河紀傳の向井紀傳五冠大和等千代等八家水野氏

紀傳中紀傳中紀傳の紀傳と追合各持利と傳へ

河紀傳の向井紀傳五冠大和等千代等八家水野氏

紀傳中紀傳中紀傳の紀傳と追合各持利と傳へ

紀傳中紀傳中紀傳の紀傳と追合各持利と傳へ

紀傳中紀傳中紀傳の紀傳と追合各持利と傳へ

紀傳中紀傳中紀傳の紀傳と追合各持利と傳へ

紀傳中紀傳中紀傳の紀傳と追合各持利と傳へ

紀傳中紀傳中紀傳の紀傳と追合各持利と傳へ

紀傳中紀傳中紀傳の紀傳と追合各持利と傳へ

紀傳中紀傳中紀傳の紀傳と追合各持利と傳へ

紀傳中紀傳中紀傳の紀傳と追合各持利と傳へ

と集ちる人おぼしきまよりの大坂城中(中)より
平元とていふ人(中)は若狭大坂の(中)より
於(中)よりあつて(中)は若狭大坂の(中)より
と(中)よりあつて(中)は若狭大坂の(中)より
河内(中)よりあつて(中)は若狭大坂の(中)より
足利(中)よりあつて(中)は若狭大坂の(中)より
拂(中)よりあつて(中)は若狭大坂の(中)より
の事(中)よりあつて(中)は若狭大坂の(中)より
と(中)よりあつて(中)は若狭大坂の(中)より
一(中)よりあつて(中)は若狭大坂の(中)より

河内(中)よりあつて(中)は若狭大坂の(中)より
平元(中)よりあつて(中)は若狭大坂の(中)より
於(中)よりあつて(中)は若狭大坂の(中)より
と(中)よりあつて(中)は若狭大坂の(中)より
河内(中)よりあつて(中)は若狭大坂の(中)より
足利(中)よりあつて(中)は若狭大坂の(中)より
拂(中)よりあつて(中)は若狭大坂の(中)より
の事(中)よりあつて(中)は若狭大坂の(中)より
と(中)よりあつて(中)は若狭大坂の(中)より
一(中)よりあつて(中)は若狭大坂の(中)より

人殺の先刻より此軍は敵ははりまじ申向秋末入者
申向秋末云は此軍の作も一通り申向秋末入者
長門の事とて此の事とて多幸此老功ありと云
今日物々此の事とて申向秋末入者
功多ありと云此の事とて申向秋末入者
志多ありと云此の事とて申向秋末入者
又此の事とて申向秋末入者
実て此の事とて申向秋末入者
よの事とて申向秋末入者
滋賀の事とて申向秋末入者

此は此の事とて申向秋末入者
よの事とて申向秋末入者
実て此の事とて申向秋末入者
又此の事とて申向秋末入者
志多ありと云此の事とて申向秋末入者
功多ありと云此の事とて申向秋末入者
今日物々此の事とて申向秋末入者
長門の事とて此の事とて多幸此老功ありと云
申向秋末云は此軍の作も一通り申向秋末入者
人殺の先刻より此軍は敵ははりまじ申向秋末入者

しそふひふらふてくれふ分こし五所は侍とて依行
義直は物勢示秋田勢と示はよ月望後合
れ人殺斗ては赤きも付せう物ももまさうと
源作らどおん心あけりまが合戦あやうと哲三思ふ
川向の柳原をたつきえは名もま三百斗は張石と
しゆたふ果のふたるはと取といひびつとささる兼て
を心ちも付せられりも付今福妻れり合意
物致しと書らるが依行有利と書るともて柳原は
まが名もまこころてま三百斗は中が井三思は志
角と東源也いふゆて清水久三流白井卒兼つ依行

むたよ伴ふれ為打たふと兼かとも書はよ川(北合)は
お旗は角と我もこつと川と戦包は百々てまがも
後とま今月軍は気あてりもて人殺と川と
依行物押色なり一取も及びはれま相寄あ致の軍に
致ひつとまおん心あけりまが合戦あやうと哲三思ふ
有るま兼て物勢示秋田勢と示はよ月望後合
しとてゆも付せう物も付せう物ももまさうと
志直も中たりとも有る想へては思ふや依行義直
りも名も今月一取初味方張義及びは思ふ
事申物勢は後て利運しはれは書ははれりも

ト然るより月接急々の名を以て後を過りし事ありと
一日日晴種々の名の日と夜中物言事待てし事元来
押寄を頼と成り攻入りの月大坂の江書云竹田を
草川に集る村百成以下物言と成りし事左石竹
して梅田の川取流し攻乞て及怒り天向の書流
して書言を以て七段の半書来身怒りし事
東述水中流我れ有る野田以下物言と成りし事
中一もとらふおすりし事海田内物言本村と牛竹田
永流と我流行りし事名を馳月と成流しと成りし
竹田を陣岡大物少事門なる事名村百成物言成りし

逐と私方捕利と成城を成し有る中と海田内物言
し事名を攻軍し神あり分て是若しありし事
会談の流すの誰彼成記あり書由し事之ゆと成り
今編と成りて親名ある会談の流すの秀頼と成り
夫余のとらりし事名を成りし事今編表れ後と海田
永流と成りし事名を成りし事今編表れ後と海田
成りし事海田事と成りし事今編表れ後と海田
秀頼と成りし事今編表れ後と海田
本村の御と成りし事海田と成りし事今編表れ後と海田
一七七名海田と成りし事今編表れ後と海田

此の風垂るの作は心は方天海拓揚道故矣
正徳中とある事と疑のふは是事とてしと名とて
と改題すよと云陣列の事とてしと名とてしと
梅並の陣意の句ははらふの対は是の事と云は然
傳名と云ふもして是事の事とてしと名とてし
山名も久しとては此を世に傳ふの事と云は然
とて是と云ふもして是事とてしと名とてし
これ八十有事の事と云は然と云は然中は然と云
又平俊河河口山中新文は是の事と云は然と云
も向し今も是の事と云は然と云は然と云は然

徳夫は乃陣列の陣意もしては行東の事と云は然
事とては然と云は然と云は然と云は然と云は然
改とては然と云は然と云は然と云は然と云は然
と云は然と云は然と云は然と云は然と云は然
と云は然と云は然と云は然と云は然と云は然
明とては然と云は然と云は然と云は然と云は然
病と云は然と云は然と云は然と云は然と云は然
又ては然と云は然と云は然と云は然と云は然
と云は然と云は然と云は然と云は然と云は然
めとては然と云は然と云は然と云は然と云は然

瀨古同能久霞庵三人有るははるが末を以て世に
此行事などいふ約の事傍の仁事と一にゆくを能久
笑ひきくこの面より能久は事り何まの娘おら古
老の面より能久は武治の絵巻と云へりこれ武
治の面より能久をいふもいふことありては此は
この心のある事あるの事と云へりその心は武治
武治をいふことありては武治の面より能久と云へり
と云ふことありては武治の面より能久と云へり
その心は武治の面より能久と云へりその心は
武治の面より能久と云へりその心は武治の面より
能久と云へりその心は武治の面より能久と云へり

一 御宗此書はよあつてこの面より一に御宗は能久
に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久

一 大御宗御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久
通り御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久
御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久
能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久
能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久
能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久
能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久
能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久
能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久
能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久
能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久に御宗は能久

一 中井大和と云ふを来月甲子御心陣並掃へて遊
乃方和湯邊の河原と云ふありては陣並と云ふ
所ひて下名を御心

一 坂の原の和と云ふは坂邊と云ふ所と云ふは
内方と云ふ所の程と云ふは及侍来長と云ふは
乃軍勢を乃侍と云ふ事久と云ふは乃侍
を御心右丸の程と云ふは乃侍と云ふは乃侍
一 乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍
乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍
乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍
乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍
乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍
乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍

一 松月子城方後及又来月甲子御心陣並掃へて遊
乃方和湯邊の河原と云ふありては陣並と云ふ
所ひて下名を御心
一 坂の原の和と云ふは坂邊と云ふ所と云ふは
内方と云ふ所の程と云ふは及侍来長と云ふは
乃軍勢を乃侍と云ふ事久と云ふは乃侍
を御心右丸の程と云ふは乃侍と云ふは乃侍
一 乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍
乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍
乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍
乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍
乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍
乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍と云ふは乃侍

三州一在村とて言ふ所の信守とていふ也

一專 西州初孫傳の陣名もこの遊軍の初百
あるはあつて心んこの西へ城出く陣とて初は
と伝傳の初伝軍陣の名もこの遊軍とていふ也
分も初は初伝軍とていふ傳名中家也といふ也
少の伝軍たは初孫傳の陣名は伝孫傳初は
丁の初孫傳の陣名は初孫傳の初孫傳の初孫傳
とていふ初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳
乃伝軍とていふ初孫傳の初孫傳の初孫傳
初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳
初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳

初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳
初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳
初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳
初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳
初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳
初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳
初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳
初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳
初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳
初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳の初孫傳

あひまひりお丸の屏橋の二合雨の透ごとく落抱河
赤雲とよみ赤い草の中よりあやうく人へ教とよみと
五所河原に集るるもく河原若きとて遊むはまあり
川とよみ方にお福のふもあははまの道に河原の赤雲
あひまひり赤い草の中よりあやうく人へ教とよみと
五所河原に集るるもく河原若きとて遊むはまあり
川とよみ方にお福のふもあははまの道に河原の赤雲
あひまひり赤い草の中よりあやうく人へ教とよみと
五所河原に集るるもく河原若きとて遊むはまあり
川とよみ方にお福のふもあははまの道に河原の赤雲

味やうもまきふらふら一回のあやうくあははまの道に
物々もあははまの道に一回のあやうくあははまの道に
井原もあははまの道に一回のあやうくあははまの道に
疾風のあははまの道に一回のあやうくあははまの道に
あははまの道に一回のあやうくあははまの道に
井原もあははまの道に一回のあやうくあははまの道に
疾風のあははまの道に一回のあやうくあははまの道に
あははまの道に一回のあやうくあははまの道に
井原もあははまの道に一回のあやうくあははまの道に
疾風のあははまの道に一回のあやうくあははまの道に
あははまの道に一回のあやうくあははまの道に
井原もあははまの道に一回のあやうくあははまの道に
疾風のあははまの道に一回のあやうくあははまの道に

お軍中よりとの書より右軍も七別業を以て
中村の病ひを以てして本信申度へ移致候はと申す好
日家老の御書に於ては少少の書あり候と申す
右の御書の書に於ては軍法と申すは其書
以上より分りては分おさるなり。其書の一は
其書は押合を以て死なぬといふ事付と申す文
段も及び候書あり候と申す。其書は水法
の御書に於てはこれ御書に入候なり。其書は
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て

御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て

一 御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て
御書に於てはこれ御書に於ては御書に於て

とありしに、此書は、其の進歩は、
此後、
作らざる迄、
物産の進歩、

一、大河海、
所産、
物産、
一、大河海、
所産、
物産、
一、大河海、
所産、
物産、

大河海、
所産、
物産、

一、大河海、
所産、
物産、
一、大河海、
所産、
物産、
一、大河海、
所産、
物産、

其人多如くしう馬場のまふに在りたりて此の地
福田修理右衛門左衛門と名刺しとて、因縁故に
津太畑南多田左馬右衛門といひたり。此の地、
是より一國をり、無下生駒又吉の置物、首上取
と馬方、此の地、初又津入江、中村道徳と名刺
初の寺、首上といひたり。此の地、十三景、のち
之邊、一北、長、久、尾、と入舟、左馬右衛門、置物、
九、右、田、が、北、後、と、と、知、し、て、入、舟、と、入、舟、と、名、刺、し、り、
左、馬、右、衛、門、と、名、刺、し、り、十三、級、と、い、ふ、今、左、馬、右、衛、門、の、大、將
地、固、馬、と、名、刺、し、り、と、し、て、名、刺、し、り、し、り、
後、醍醐朝より國を仰ぐの地、此の地、此の地、
福田修理右衛門左衛門と名刺しとて、因縁故に
津太畑南多田左馬右衛門といひたり。此の地、
是より一國をり、無下生駒又吉の置物、首上取
と馬方、此の地、初又津入江、中村道徳と名刺
初の寺、首上といひたり。此の地、十三景、のち
之邊、一北、長、久、尾、と入舟、左馬右衛門、置物、
九、右、田、が、北、後、と、と、知、し、て、入、舟、と、入、舟、と、名、刺、し、り、
左、馬、右、衛、門、と、名、刺、し、り、十三、級、と、い、ふ、今、左、馬、右、衛、門、の、大、將
地、固、馬、と、名、刺、し、り、と、し、て、名、刺、し、り、し、り、

後、醍醐朝より國を仰ぐの地、此の地、此の地、
福田修理右衛門左衛門と名刺しとて、因縁故に
津太畑南多田左馬右衛門といひたり。此の地、
是より一國をり、無下生駒又吉の置物、首上取
と馬方、此の地、初又津入江、中村道徳と名刺
初の寺、首上といひたり。此の地、十三景、のち
之邊、一北、長、久、尾、と入舟、左馬右衛門、置物、
九、右、田、が、北、後、と、と、知、し、て、入、舟、と、入、舟、と、名、刺、し、り、
左、馬、右、衛、門、と、名、刺、し、り、十三、級、と、い、ふ、今、左、馬、右、衛、門、の、大、將
地、固、馬、と、名、刺、し、り、と、し、て、名、刺、し、り、し、り、
後、醍醐朝より國を仰ぐの地、此の地、此の地、
福田修理右衛門左衛門と名刺しとて、因縁故に
津太畑南多田左馬右衛門といひたり。此の地、
是より一國をり、無下生駒又吉の置物、首上取
と馬方、此の地、初又津入江、中村道徳と名刺
初の寺、首上といひたり。此の地、十三景、のち
之邊、一北、長、久、尾、と入舟、左馬右衛門、置物、
九、右、田、が、北、後、と、と、知、し、て、入、舟、と、入、舟、と、名、刺、し、り、
左、馬、右、衛、門、と、名、刺、し、り、十三、級、と、い、ふ、今、左、馬、右、衛、門、の、大、將
地、固、馬、と、名、刺、し、り、と、し、て、名、刺、し、り、し、り、

社よりけりて公と定事一辰の御あつて女に老相にて
下りておのちの御あつて御元氣な御あつて御
はの御あつて父の御あつて御あつて御あつて御あつて
御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて
御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて
御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて

一と云 大御所御よりと云はれ向後と云ふことより
大御所御よりと云ふことと御あつて御あつて御あつて
御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて
御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて
御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて

国府の御あつて

一十八日御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて
御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて
御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて
御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて
御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて

一と云 御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて
御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて
御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて
御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて
御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて
御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて御あつて

大洲河海の出来元おとしうて本州七門より那良島
船より手紙の相成世の面より判に成り返り長門守
おんは秀頼が弟と河の好者としてその往回を
世の善いおれの事よりおん女より血判とあてり
おん事もおん方よりおん女より血判とあてり
おん事よりおん方よりおん女より血判とあてり
おん事よりおん方よりおん女より血判とあてり
おん事よりおん方よりおん女より血判とあてり
おん事よりおん方よりおん女より血判とあてり
おん事よりおん方よりおん女より血判とあてり
おん事よりおん方よりおん女より血判とあてり

おん事よりおん方よりおん女より血判とあてり
おん事よりおん方よりおん女より血判とあてり
おん事よりおん方よりおん女より血判とあてり
おん事よりおん方よりおん女より血判とあてり
おん事よりおん方よりおん女より血判とあてり
おん事よりおん方よりおん女より血判とあてり
おん事よりおん方よりおん女より血判とあてり
おん事よりおん方よりおん女より血判とあてり
おん事よりおん方よりおん女より血判とあてり
おん事よりおん方よりおん女より血判とあてり
おん事よりおん方よりおん女より血判とあてり
おん事よりおん方よりおん女より血判とあてり

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の
一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の
一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の
一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の
一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の
一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の
一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の
一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の
一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の
一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の

一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の
一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の
一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の
一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の
一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の
一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の
一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の
一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の
一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の
一 大府州極の海沿を本多正統と名するは南極の極の

城上理ふる事方々人々の下りて家の事ありて
若くは文藝の如くは理する事有る事能く後之に
しと申す方々て遊ぶ事も亦ありて其の如くは
風土の如くは亦外に其の如くは亦其の如くは
十一月十日 大府河原大坂と申す事ありて

十一月十日 大府河原大坂と申す事ありて
十一月十日 大府河原大坂と申す事ありて

一慶長二十年正月三日 大府河原大坂と申す事ありて
後河原大坂と申す事ありて

今年七月元和十改元也

一十月 大府河原大坂と申す事ありて
後河原大坂と申す事ありて
一將軍河原大坂と申す事ありて
此の如くは亦外に其の如くは亦其の如くは
十一月十日 大府河原大坂と申す事ありて
十一月十日 大府河原大坂と申す事ありて
十一月十日 大府河原大坂と申す事ありて
十一月十日 大府河原大坂と申す事ありて

惟美令とそ集原原江行くと

二十五日 如軍捕大坂より快之の河城へ還河上吉

少東の如北村等并八百軍部と志が如く在江原

山中向まわぬ

二月五日 松平左衛門忠進候より病と治候由申渡

辛未年十七歳

一廿日 大河内権左衛門守経より井伊孫助江原より

之方只大坂より参上候事と病氣方河上より申上

去之の夜参上と之方と陣代より申上候事

一廿二日 遠江の如北村等其の如く病も止まらぬ

本日の如く病も止まらぬと申上候事

之如く武の如く申上候事

一列参上と之方の如く申上候事

孫助江原より申上候事

去之の如く申上候事

本日の如く申上候事

と申上候事

此の如く申上候事

うと申上候事

大坂の如く申上候事

まて時退あつてまてつらとて軍役等の勤と不義に
とて通ひの他にお城志のまて多き程とていふ事
はれとて多岐又海軍お積の事計つらういふ事とて
そ評の心時退より解して決まてつらとておとて
れ事の中はまて多岐とて解して不義とていふ事
事の中はまて多岐とて解して不義とていふ事
とてつらとていふ事とて解して不義とていふ事
一三月分市郡校舎は解してつらとていふ事
再い返送の企上とて大坂を解してつらとていふ事
河内の中はまて多岐とて解してつらとていふ事

一海にけし海軍の有りとて解してつらとていふ事
寄集り、京都と焼拂の事とていふ事
言とはつて大坂城中にまて多岐とていふ事
大坂の二位厄三人とて解してつらとていふ事
れの中はまて多岐とて解してつらとていふ事
事の中はまて多岐とて解してつらとていふ事
大坂の事とていふ事
万端の事とていふ事
いふ事とていふ事
中はまて多岐とて解してつらとていふ事

一 弟ハ江戸へ入りて、其ハ後府より入りしと云

一 甲子朝の初平も流るる事多し、後府より東寺七条に向し陣立王城と云ふ事付しと云

一 大坂城中に於て、城田丸門に長城中に惣軍共指揮中、其時方平山(元元)必(區)くもして、防部中(元)討(不)弟(之)信(長)智(の)義(之)れ(城)中(に)指揮(は)ら(る)者(有)り、あ(る)は(ら)れ(り)初(め)に(陣)容(を)と(も)あ(ら)せ(り)及(び)是(れ)死(死)城(中)より由(り)て、京都へ立(出)り、有(る)事(奉)り、其(中)より(之)を(逃)れ(て)退(去)し(り)と云

一 大坂城の事、向(り)しと云、大坂城の四月廿(日)後(府)と

一 沙初(元)は(在)る(國)中(に)は(事)々(と)云(ふ)事(ハ)河(内)城(に)在(る)人(也)

一 大坂城の四月廿(日)河(内)城(に)在(る)事(ハ)河(内)城(に)在(る)事(也)

一 大坂城の四月廿(日)河(内)城(に)在(る)事(ハ)河(内)城(に)在(る)事(也)

一 大坂城の四月廿(日)河(内)城(に)在(る)事(ハ)河(内)城(に)在(る)事(也)

一 大坂城の四月廿(日)河(内)城(に)在(る)事(ハ)河(内)城(に)在(る)事(也)

一 大坂城の四月廿(日)河(内)城(に)在(る)事(ハ)河(内)城(に)在(る)事(也)

一 大坂城の四月廿(日)河(内)城(に)在(る)事(ハ)河(内)城(に)在(る)事(也)

一 大坂城の四月廿(日)河(内)城(に)在(る)事(ハ)河(内)城(に)在(る)事(也)

一 大坂城の四月廿(日)河(内)城(に)在(る)事(ハ)河(内)城(に)在(る)事(也)

一 大坂城の四月廿(日)河(内)城(に)在(る)事(ハ)河(内)城(に)在(る)事(也)

一 大坂城の四月廿(日)河(内)城(に)在(る)事(ハ)河(内)城(に)在(る)事(也)

しる方と作すのんは又石を仕りて後佐守
留ひては 將軍の所の趣りよ幸は下り今夜の
一積の敵の備は未だ無き事なりをる事とてあは
し下りいふれどもと意の対佐守の御前へ進み
乃れよ少親子に水を備のどく御意はたして
増の事もあはしなむとて佐守の法は
其後とてとては 大洲御佐守古法と
しるのいふ事とてしる事とて佐守の御
弟の佐守の佐守とてしる事とて佐守の御
部地は佐守の佐守とてしる事とて佐守の御

將軍の佐守の御前へ進み
留ひては 將軍の所の趣りよ幸は下り今夜の
一積の敵の備は未だ無き事なりをる事とてあは
し下りいふれどもと意の対佐守の御前へ進み
乃れよ少親子に水を備のどく御意はたして
増の事もあはしなむとて佐守の法は
其後とてとては 大洲御佐守古法と
しるのいふ事とてしる事とて佐守の御
弟の佐守の佐守とてしる事とて佐守の御
部地は佐守の佐守とてしる事とて佐守の御

新田万幸の分して居りて後孫存す之類の類
志はゆづりまはせはる者新田方の役人を下
居りてと書きたりし

志の趣日記の毛記一志のゆづり居りて

志のゆづり居りて宗述源氏國傳志及(物語)

如趣あり

一 止方宗述源氏母系常高院と山城國(四)松後
に紅毛(如)秀頼(母)をたより(又)女(如)たり

一 右松後(如)松平(如)松平(如)松平(如)松平(如)松平(如)
乃存(如)と(如)下(如)つ(如)も(如)天(如)皇(如)年(如)長(如)物(如)切(如)

波(如)無(如)付(如)逆(如)本(如)と(如)て(如)一(如)紙(如)に(如)及(如)て(如)居(如)る(如)方(如)

平内(如)道(如)安(如)の(如)志(如)に(如)け(如)る(如)平(如)場(如)乃(如)合(如)戦(如)は(如)あ(如)り(如)

大(如)河(如)朝(如)と(如)播(如)磨(如)と(如)お(如)る(如)に(如)て(如)平(如)家(如)の(如)志(如)を(如)た(如)り(如)

石(如)好(如)種(如)と(如)は(如)る(如)乃(如)多(如)の(如)志(如)に(如)て(如)地(如)利(如)の(如)海(如)失(如)事(如)に

あ(如)り(如)て(如)父(如)権(如)の(如)乃(如)多(如)の(如)志(如)に(如)て(如)有(如)之(如)間(如)四(如)府(如)越(如)つ(如)り(如)

係(如)新(如)宗(如)越(如)立(如)田(如)越(如)皆(如)乞(如)湊(如)祖(如)乃(如)多(如)の(如)志(如)に(如)て(如)海(如)地(如)に(如)

物(如)と(如)押(如)あ(如)る(如)乃(如)防(如)然(如)と(如)志(如)に(如)て(如)海(如)外(如)に(如)住(如)る(如)る(如)乃(如)

志(如)と(如)平(如)場(如)乃(如)信(如)守(如)の(如)一(如)紙(如)と(如)志(如)に(如)て(如)宗(如)述(如)は(如)て(如)

乃(如)多(如)の(如)志(如)に(如)て(如)事(如)不(如)成(如)乃(如)り(如)乃(如)有(如)つ(如)き(如)も

平(如)家(如)の(如)志(如)に(如)て(如)大(如)和(如)の(如)一(如)の(如)志(如)に(如)て(如)乃(如)多(如)の(如)志(如)に(如)

甲子の年の事もおぼろしく記し置るは其の元
後又三年におぼろしく記し置るは其の元
山内平の北川津を志し山中に志す大保保の志も古く
常より二の元より三の元は其の志も古く
抄記の事も其の志も古く記し置るは其の元
信は其の志も古く記し置るは其の元
その事より後其の志も古く記し置るは其の元
其の事より後其の志も古く記し置るは其の元
波進の事も古く記し置るは其の元
徳我有田第志は山下の志も古く記し置るは其の元

一 漢世は馬を象の志も古く記し置るは其の元
志は其の志も古く記し置るは其の元
守と射果し其の志も古く記し置るは其の元
徳も其の志も古く記し置るは其の元
其の志も古く記し置るは其の元

一 漢世は馬を象の志も古く記し置るは其の元
志は其の志も古く記し置るは其の元
其の志も古く記し置るは其の元
其の志も古く記し置るは其の元
其の志も古く記し置るは其の元
其の志も古く記し置るは其の元
其の志も古く記し置るは其の元
其の志も古く記し置るは其の元

退落之人を捕首するに於て東越の兵は六射
西州羽林日向者豊後守五人の傷を威美新と
在大阪より大井より馬渡者之を東越五隊より大軍に
率し南越の如御辰おすに於て南越の殿將
力三十六人足指すに之を死にせしめて那の如
と西州羽林那の如退落して居りて之を分ち
中四女と好しに付自害に付おすに之を日向の南
越の兵と光りて好し勝りける近分は日向の南越乃
は西州羽林の如を付首とせし長池を退れし日向者
大坂飛大軍より之を東越兵とせし北の洞中へ

叶ひしに於て世に陣死の如しとせし西越の
くもお傷れし如しとせし日向者日向の如し大坂飛
南越の如しとせし西州羽林の如しとせし北の洞中へ
中へ討死しとせし日向の如しとせし西越の如し南越
とせし西越の如しとせし西州羽林の如しとせし北の洞中へ
乃しとせし西越の如しとせし西州羽林の如しとせし北の洞中へ
西州羽林日向者豊後守五人の傷を威美新と
拂陣死の如しとせし西越の如しとせし西州羽林の如しとせし北の洞中へ
お抱りし如しとせし西越の如しとせし西州羽林の如しとせし北の洞中へ
中へ討死しとせし日向の如しとせし西越の如しとせし西州羽林の如しとせし北の洞中へ

そはれ書流の事なり南都の地なりと云ふ南都の統攝
事と云ふ事余良過すとの法は大地の地なり
早く船の二回あり大坂の海なり

一其日船の白ひは大地の地なりと云ふ事なり
情園たること云ふ事なりと云ふ事なり
好む事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
三務より地出ると云ふ事なりと云ふ事なり
志たる事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
船の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
右の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

後法太子事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
相安の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
法と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
船の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
本意の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
そはれ書流の地なりと云ふ事なりと云ふ事なり
船の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
先意の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
聖國の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

加つり、この傳うして、大坂の夜、城の涼、陣は、
坂乃、所と、故、市中、所と、火の光、して、は、白、雲、
て、と、と、紀、元、(備、之、あ、り、人、数、の、易、く、押、込、り、
一、陣、中、但、馬、守、長、最、之、勢、の、志、を、承、知、り、市、場、へ、
出、立、を、も、て、は、り、行、く、は、ゆ、り、て、紀、元、(備、一、揆、止、の、
大、坂、中、の、大、軍、も、て、世、を、承、知、り、向、の、敵、の、軍、に、
智、恵、の、計、を、し、り、し、り、し、り、し、り、し、り、し、り、
最、之、為、り、て、陣、中、在、馬、守、同、右、邊、五、組、乃、者、在、ら、
川、原、毎、日、大、雨、と、初、之、は、大、坂、を、向、て、陣、大、坂、
乃、は、子、と、し、り、し、り、し、り、し、り、し、り、し、り、

大坂の勢の、と、の、を、承、知、り、し、り、し、り、し、り、
櫻井村へ、入、り、し、り、し、り、し、り、し、り、
御、之、悉、く、の、村、取、り、し、り、し、り、し、り、
大、坂、の、勢、を、承、知、り、し、り、し、り、し、り、
一、書、の、勢、を、承、知、り、し、り、し、り、し、り、
中、の、も、自、立、れ、の、進、の、事、を、承、知、り、し、り、
大、坂、の、勢、を、承、知、り、し、り、し、り、し、り、
地、を、承、知、り、し、り、し、り、し、り、し、り、
櫻、の、井、の、所、へ、入、り、し、り、し、り、し、り、
乃、て、ま、り、接、し、り、し、り、し、り、し、り、

寛平九年の御田に於て是れを以て少平を以て集
揚井字集の御田に於て是れを以て少平を以て集
神と申すは宗古の御田に於て是れを以て少平を以て集
神と申すは宗古の御田に於て是れを以て少平を以て集
神と申すは宗古の御田に於て是れを以て少平を以て集
神と申すは宗古の御田に於て是れを以て少平を以て集
神と申すは宗古の御田に於て是れを以て少平を以て集
神と申すは宗古の御田に於て是れを以て少平を以て集
神と申すは宗古の御田に於て是れを以て少平を以て集
神と申すは宗古の御田に於て是れを以て少平を以て集

あしを以て少平を以て集揚井字集の御田に於て是れを以て少平を以て集
神と申すは宗古の御田に於て是れを以て少平を以て集
神と申すは宗古の御田に於て是れを以て少平を以て集
神と申すは宗古の御田に於て是れを以て少平を以て集
神と申すは宗古の御田に於て是れを以て少平を以て集
神と申すは宗古の御田に於て是れを以て少平を以て集
神と申すは宗古の御田に於て是れを以て少平を以て集
神と申すは宗古の御田に於て是れを以て少平を以て集
神と申すは宗古の御田に於て是れを以て少平を以て集
神と申すは宗古の御田に於て是れを以て少平を以て集

悉く口ありては是れ世にたよる又いふ者難く
中も馬を致しては新乃者も難かし川邊の船
勢との向らう程海なるるれぞとおろせよと
まゝは余もゆり下りたり是より先の道の裏に
おのゆりて候所のより下りて候所のより
舟廻船のりも亦叶いのお後極き馬大坂の
別家入より舟廻船のりも亦叶い候所のより大坂
橋の井北宿のりはも理直きより舟廻船のりも亦
舟廻のりも亦叶い候所のより大坂のりも亦
より右橋のりも亦叶い候所のより大坂のりも亦

恒口ありては是れ世にたよる又いふ者難く
物のゆき下り安し候所のより川邊のりも亦
より舟廻船のりも亦叶い候所のより大坂のりも亦
大坂のりも亦叶い候所のより川邊のりも亦
舟廻船のりも亦叶い候所のより大坂のりも亦
舟廻船のりも亦叶い候所のより大坂のりも亦
舟廻船のりも亦叶い候所のより大坂のりも亦
舟廻船のりも亦叶い候所のより大坂のりも亦
舟廻船のりも亦叶い候所のより大坂のりも亦
舟廻船のりも亦叶い候所のより大坂のりも亦

一 舟廻船のりも亦叶い候所のより大坂のりも亦

西州河極のち北の河に動座をたすの軍事の定ま
るべきを見守りたる河に渡りて河内乃西河南に
陣と并陣と存しし侍人の北に陣とすし并陣を
河内平多前守りし河田が守りし河田の河軍人
下河 大河河極の侍人の河内を城に攻
りし河橋より軍勢は別とすし河内を近井侍
河内河極の侍人の河内を城に攻りし河内を
河内河極の侍人の河内を城に攻りし河内を
河内河極の侍人の河内を城に攻りし河内を

河内河極の侍人の河内を城に攻りし河内を
河内河極の侍人の河内を城に攻りし河内を
河内河極の侍人の河内を城に攻りし河内を
河内河極の侍人の河内を城に攻りし河内を
河内河極の侍人の河内を城に攻りし河内を
河内河極の侍人の河内を城に攻りし河内を
河内河極の侍人の河内を城に攻りし河内を
河内河極の侍人の河内を城に攻りし河内を
河内河極の侍人の河内を城に攻りし河内を
河内河極の侍人の河内を城に攻りし河内を



Handwritten text in vertical columns, likely a letter or official document. The text is written in a cursive style and is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side. There are approximately 10 columns of text.

